



農業期の生活の合理化をと、鶴吉では共同炊事が行われていた。婦人たちの話し合いで始まったもので、大変喜ばれていた。写真は食事をもって帰る地域の人々。(昭和33年)

先人の苦勞が刻まれた歴史 探る

横田の盆踊りのエピソード。成功のカギは、先人の心を学ぶことにあった。
だからこそ知っておきたい。分館活動、公民館活動のルーツとは？

社会教育の必要性を訴え 動いた青年団

公民館は、地域の人々に最も身近な学習や交流・地域課題への取り組みの場として、大きな役割を果たしてきました。そのルーツは、終戦直後にさかのぼります。

当時を知る元公民館主事の重川利春さんは言います。
「青年団が社会教育の必要性を訴え、公民館ができた」

昭和23年、青年団の熱意に動かされた旧松前町は、松前小学校講堂2階に公民館を設置。26年には、松前保育所に併設の「松前公民館」を建設し、常勤主事を配置しました。

北伊予村でも、自ら学習することの必要を痛感した青年たちが地区の協議所に集合して学習会を開き、生活と教育の課題を設定し、公民館活動を展開していった。

岡田村でも、青年団と婦人会が中心となって生活改善・生活合理化などに尽力。28年には、独立した岡田村公民館が建設されました。「当時、単独の公民館は県下でも珍しく、参観者が毎日のように訪れていた」と重川さんは話します。

30年には、町村合併が行われ、北伊予・松前・岡田公民館が発足。以後変遷を経て、役場が現在地に新築された39年、今の名称である東・西・北公民館と改称されました。

当時、北伊予公民館主事だった松田清太郎さんは、「地域の課題をあらゆる団体が持ち寄って解決しようというのが公民館活動だった」ときっぱり。

元中央公民館主事の友田秀謙さんは「毎晩のように講座を開いていた。農業や子育てなど、地域社会をよくするためのテーマが中心だった。遊技場ができることをテーマにして、婦人会が青少年の健全育成に良くないと反対運動をしたこともあった。地域課題など、世の中の流れを的確につかむのが公民館活動だった」と振り返ります。

「講座を開けば、座れないほどの人であふれていた。特に家庭教育学級は人気で、若い夫婦であふれ、子どもも一緒に公民館に来ていた」と3人は口をそろえます。

社会の最先端を行く 公民館

41年2階建ての中央公民館が

松田清太郎さん (東古泉)



当時は地域の課題をあらゆる団体が持ち寄って解決しようというのが公民館活動だった。今では自分のためになってしまっていないか。昔は趣味のグループが「発表会をしよう」と、自主的に活動していた。今は受動的になっていないか。公民館活動は、社会、家庭、学校教育を一つにし、地域の人の結びつきを高めていく場。今の地域の課題を公民館活動に取り入れると、地域も人も良くなるはずだ。

S.34~北伊予公民館/S.39~中央公民館/S.41~社会教育主事、教育委員会事務局/S.42~社会教育係長/S.43~公民館長補佐

公民館活動に尽力した3人に聞く



建築されると、活動は一段と活発に。重川さんは「中央公民館は町の社会教育全体をどうするか、3校区を総括していた。地域の課題を持ち寄って考える、また反対に地域に提案した」と話します。
「生活改善運動の一環として、中央公民館で結婚式もやっていた。私も50組ほどの結婚式に携わった。その後、中央公民館に体育館が必要ということで、町民会館ができ、坪内寿夫さんが本を寄付するということで図書館もできた」と友田さん。「東京オリンピックで町民の体育に対する関心が高まっていた。町民会館は、体育の進歩に大きく貢献した。いろんな面で公民館は社会の最先端を行っていた」とも。

分館活動で軌道にのった コミュニケーションづくり

松前町は、49年には優良公民館として文部大臣表彰を受けました。中央公民館活動はとても活発でしたが、地域の隅々までいきわたった自主的自発的活動にまでは至っていないとの反省から、次第に地区の公民館の在り方を考えていくように。

友田さんは「分館活動で地域の

絆を作ろうと、公民館の機能を持たせた。分館制度を取り入れた」と話します。
その後、24地区中、毎年2館ずつモデル公民館を委嘱して研究活動を進め、54年には全公民館がモデル館終了。地域の特色を生かしたコミュニケーションづくりが軌道にのりはじめました。また、校区に地区公民館を設置。主事は専任で常駐とし、地域と一体となつて公民館活動の強化を図りました。徐々に分館を中心に、地域に密着した取り組みが進められてきました。
松前町の公民館活動は、学校、家庭、社会が一体となつて、自主的自発的精神による明るく豊かな地域づくりを目指して、前進を続けました。
「ただ楽しんでいたのではない。仲間と共に、地域を豊かにしたい。それこそが、活動の原点だった」
みんなが笑顔で公民館に集い、知恵を出し合いました。昨今のデジタルとは無縁の時代。物質的には決して豊かではなかったかもしれませんが。でも、地域は強い絆で結ばれ、楽しみ、地域をよくしようという気概を持っていたのです。

社会教育主事の資格を取るのに、2ヵ月間、大学に入って猛勉強。それこそ血を吐くような苦勞だった。その苦勞がすぐに吹き飛ぶほど、社会教育主事の事は華があり、楽しみがあった。地域の人とのつながりがそれだ。主事同士のつながりも深かった。私たちの時代に箱モノは全部つくることができたと思う。今、大切なのは、地域づくり、人づくりだ。



S.30~岡田村公民館主事/S.34~松前公民館兼務/S.39~社会教育係長/S.57~教育課長/S.63~北公民館長

重川さんと一緒に公民館に戻って驚いた。地域の人が「利さん、おかえりなさい」と言っていた。そんな主事になりたいと憧れ、励んだことを覚えている。「公民館は地域のお茶の間」。重川さんからその言葉を受け継いでいた。公民館は、いろんな人が集い、いろんなアイデアが出てくるのがいいところ。分館に調理実習室があるのもその表れ。農繁期に料理ができない婦人が共同炊事をして助け合っていたからだ。



S.40~中央公民館主事/S.47~社会教育主事/S.54~社会教育係長/S.55~教育課長補佐兼中央公民館長補佐/S.60~教育課長兼中央公民館長/S.63~社会教育課長兼中央公民館長

重川利春さん (昌農内)

友田秀謙さん (西古泉)

公民館活動の 今とこれから

知る

松前町公民館研究大会・生涯学習推進大会が開かれた。大会から、公民館活動の意義や魅力、そして努力や課題をレポート。

「第33回松前町公民館研究大会・平成23年度松前町生涯学習推進大会」は2月5日、松前総合文化センターで開催され、約500人が参加しました。

「元気になるまちづくり 好きです！松前町」の大会テーマのもと、出作、新立、恵久美の3分館が事例を発表し、会場の参加者との意見交換を行いました。

出作分館は「先人達がやってきたことを時代に合うよう改善しながら続けることが大切」という観点で、子ども相撲、獅子舞、亥の子などの伝統文化の保存継承活動などを報告。昨年からは始めたという桜植樹についても発表しました。これは、小学校1年生が桜を植樹し、木のそばに

にも取り組み、地域で子どもを育て、大人も一緒に成長したい」と述べました。

恵久美分館は、運動会、文化祭、資源ごみ回収活動などを報告。山岡勝利分館主事は「行事は30数年継承されているものが多く、定着している。問題は、内容や参加者が固定化していること。日頃から近所との触れ合いを大切にして、お互いが家族のことを知り合える関係を作っていききたい。『牛（孫）にひかれて善光寺（公民館）まわり』になることを期待する」と述べました。

その後の意見交換では、「行事への参加者が少ない」「どんな活動を望んでいるか、情報が集まってこない」「マンネリ化している」など、分館活動が抱えるさまざまな課題について意見が交わされました。

地域の課題をみんなで持ち寄って話し合う。

先輩たちが「地域をよくしたい」と続けてきた公民館活動。この大会自体が、まさに町が一つになる公民館活動です。そして、一つの評価の場でもあります。大会スタート当初から、1年の活動を反省し、次年度の計画を

作文や絵などを埋め、成人式に開けようというユニークな行事。小松敏分館主事は、「行事で体感した喜びの積み重ねが、一人一人の元気を生み、地域への愛着を目標させます。そのお手伝いが分館活動の目指すところであり、地域の元気の源になると信じています」と訴えました。

新立分館は、地域に多くの史跡や文化遺産があることに触れ、住吉神社の改築や環境整備で見せた住民の活躍を紹介。村上朋子分館主事は「人が集まらなければ交流にならないし、活動は継続することで発展につながるけれど、マンネリ化してしまう恐れもある。古くからあるものを大切にしながら、新しいこと

練るということが繰り返されてきました。

かつて、中学生は勉強や部活動に忙しく、地域行事に参加できなくて当然と思われていました。しかし、徳丸分館で中学生に運動会での役割を持たせ、大成功したことがありました。その話はやがて校区内に広がり、公民館研究大会で発表されると、各分館にも広がって、町全体の地域行事で中学生が活躍する姿が見られるようになりました。

この大会では、分館の独自性、多様性を尊重しつつ、活動を向上させるために、分館間の相互的な刺激と交流も図られています。

今大会のコーディネーターを務めた中予教育事務所の中弘社会教育課長は、「外から見ると、松前町の公民館活動は素晴らしい。中央公民館があつて、地区公民館があつて、さらに分館がある。どこを見ても、こんなにしっかりした組織があるところは珍しい。愛媛の公民館活動は全国でも1、2位といわれている。その愛媛でトップクラスを誇るべきことです。マンネリ化を恐れず、地域性を大切にしてほしい。祭りやイベントを通じ



1_ 3分館の事例発表の後、会場の皆さんと意見交換が行われた
2_ 恵久美分館の山岡勝利主事 3_ 新立分館の村上朋子主事
4_ 出作分館の小松敏主事



た人とのつながりを大切にしてほしい。子どもの姿がある活動を続けてほしい」と総括しました。

「自主的自発的な精神による明るく豊かな地域づくり」を指して歩み続けてきた松前町の公民館活動。これらの活動は、地域の元気を保ち、住民同士の絆を深め、たくさんの方の幸せをつくってきました。

震災後、人と人とのつながり、地域コミュニティの大切さを再認識した今だからこそ、地域の中で今何ができるか、もともととみんなが知恵と力を出し合う地域づくりが必要です。

平成23年度公民館活動功労者受賞者(敬称略)

- | | | | |
|-------|-------|-------|------|
| 徳丸分館 | 仙波康宏 | | |
| 中川原分館 | 弓達武範 | | |
| 中川原分館 | 白石浩輔 | | |
| 横田分館 | 日野榮藏 | | |
| 宗意原分館 | 尾田チエ子 | | |
| 昌農内分館 | 長井優 | 西高柳分館 | 大西端午 |
| 西古泉分館 | 稲田輝宏 | 塩屋分館 | 三好郁徳 |

松前町の公民館活動は誇るべきことです。どの分館を見ても、運動会、秋祭り、どんど焼きなど、さまざまな活動を熱心に行っています。分館として建物があつて、組織的に活動しやすいこともあるでしょうが、やはり「地域をよくしよう」という思い、「つながろう」という連帯意識が残っているからこそ続けてこられたんだと思います。私からは3つのことをお願いしたいと思います。①継続しているものを続けてほしい。マンネリ化の心配もあるかもしれませんが、大切に守り、年中行事化していただきたい。子どもにとってはこの時期になればこれが見られるというのはものすごく楽しみ。通過儀礼的なものとして



中予教育事務所
社会教育課長
田中 弘さん

取り組み、子どもは大事にしてもらっていると実感し、地域への愛着を持つ。だからマンネリ化を恐れるよりも、地域性を大切に。②祭りやイベントを大切にしてほしい。役員の皆さんは、準備から本当に大変。だけど、その活動から役員を中心としたつながりができていく。③子どもの姿がある公民館活動を続けてほしい。子どもがそこにいてくれることで、大人も癒やされる。出作の子は出作に任せなさいという気持ちで、地域の子は地域で育ててほしい。—そうすれば、子どもたちにとって、地域はいつまでも「心のふるさと」になります。それがまちの未来につながっていくのです。

挑む 目指すのは住民総参加

私たちを取り巻く様々な課題に対し、住民が協力して活力ある地域づくりを目指すのが「公民館活動」。今、まさに課題に対応するために取り組んでいる活動例を紹介します。



1_ひまわりの定植作業 2_ひまわり祭り 3.4_月1回の分別・回収作業には、環境部員と老人クラブの有志が参加

福祉部長
宮内明美さん



北黒田分館長
大西安廣さん



北黒田地区 地域の人との ふれあいを大事に 一致団結

北黒田は、世帯数1200戸、筒井に次ぐ大きな地域です。近年、新興住宅が増え、住民が増加。一方で少子高齢化や核家族化の進行により、独居老人数は年々増えています。そんな中、力を入れているのは福祉活動。平成20年には、自主防災会を結成したことを機に、福祉部を創設。民生委員と見守り推進員が中心になって、独居老人や日中一人で家にいる高齢者、災害時に救護が必要な人などを把握し、日々の見守りを重点に情報交換を行っています。福祉部長の宮内明美さんは「地域のひととの触れ合いを大事にしています。日常的にも情報交換できるいい機会」と話します。

北黒田は、地域の人とのふれあいを大切に、一致団結できる環境づくりを目指した公民館活動を続けています。5月には、南黒田と合同で防災訓練を実施予定。「福祉部や消防団と協力して子どもも独居老人も参加する訓練にしたい。弱い人には元氣な人が手を貸し、みんなで力を合わせる活動がしたい」と大西分館長。北黒田は、地域の人とのふれあいを大切に、一致団結できる環境づくりを目指した公民館活動を続けています。

中川原地区

地域を思う 農家の強い意志で コミュニティー再生

北は重信川を隔て、松山市に接する中川原。古くから重信川の伏流水と湧水を水源に、水田農業が盛んに行われてきました。しかし、昭和40年代以降、農家の高齢化、担い手不足などにより、農業は過渡期を迎えていました。

また、松山市のベッドタウンとして、非農家世帯の転入により混住化が進むなど、次第にコミュニティー活動は低下。さらには、水田や水路に空き缶などのごみが目立つようになり、農村環境の悪化も見られるようになっていました。地区では、これらの課題を解決するため、農家が中心となって活動を開始しました。自治区の各部と「中川原生産組合」が連携し、各種活動が行われています。

環境部長の白石浩輔さんは「スタートして10年。ごみを再利用する意識は高まってきた。これからは、ごみを減らす意識を高めていきたい。みんなで力を合わせなければ、自分たちの地域は良くならない」と話します。大政勉一分館長は、「リサイクルセンターは、住民が顔見知りとなる重要なコミュニケーションの場でもある」とこころ。中川原では、地域を思う農家の強い意志とおおらかなさにより、新たな絆が結ばれ、全世帯が暮らしやすい「地域づくり」への参加が進んでいます。

環境部長
白石浩輔さん



中川原分館長
大政勉一さん



1_ふれあいの日の花販売 2_出来たてが食べられるバザー 3_定期的に行われている高齢者向けサロン 4_「本当にうれしかった」と本田ミヤコさん(89)から届いた年賀状への返事



❖ 神崎地区 ❖

地域の良さを
見つけながら
世代間交流

神崎は、夏祭り、秋祭り、運動会、文化祭と、1年を通して行事を盛大に開催しています。しかし、近年、若い世代の流出、少子化などにより、コミュニティ活動や伝統文化の継承が困難に。こうした中、地元の高齢者が立ち上がり「かんざき塾」を開講。これは、伝統文化や郷土食など、後世へと伝え残したい地域の良さを、地元の高齢者が講師となり、子どもたちと一緒に学習するというもの。主宰する高石勤さんは、「何より子どもたちが郷土を知ってほしい」と語ります。

3年目の本年度は▽神崎の生い立ち▽神崎の水はどこから▽大念仏とお盆の行事▽亥の子▽ひな祭りとお盆の行事▽亥の子▽ひな祭りとお盆の行事などをテーマに講話、現地巡回や体験学習が繰り広げられ、郷土について学びながら、子どもたちがお年寄りたちと触れ合う和やかな光景が見られました。高齢者の知識や技術は地域の文化。世代間交流や地域の活性化を図るだけでなく、高齢者の生きがい対策にもつながります。

熟生の池内求さん(75)は「この年になっても知らないことがあった。大念仏や亥の子など、その意味を知って、若い人にとりこんで入ってもらって、絶やすことなく続けていきたい」と話していました。高石さんは「回を重ねることに参加者が増えてきた。来年はもっとたくさん子どもたちが来てくれるのでは」と自信をのぞかせます。

かんざき塾主宰
高石勤さん



1_運動会で活躍する中学生 2_腕を振るう農政婦人部 3_恒例行事「どんど焼き」には大勢の人が参加



公民館から
幸民館へ

「みんなが協力して、明るく豊かな地域づくりをしよう」という思いを原点に始まり、人々が集い、知恵を出し合い、協力し合ってきた松前町の公民館活動。先輩は、その思いを受け継ぎ、誇れる公民館活動を継続させてきました。もちろん、活動を進める中で、さまざまな課題はあるでしょう。しかし本来、課題に対応するために住民が協力するのが公民館活動。先に挙げた分館活動は、地域の課題を見つめ、暮らしやすさやコミュニティの心地よさを追求し、実現しています。高齢化、住環境の変化、近所付き

合いの希薄化など、課題に対応しようとすればするほど、地域コミュニティは強固なものになるのです。

公民館は、住民主導、「公」設「民」営だから公民館です。誇れる公民館活動を展開している松前町ですが、この現代において「公」設「公」営になっていないでしょうか。

公民館活動の目指すものは、自主的自発的な精神による明るく豊かな地域づくり。それは住民一人一人の幸せにつながります。各地域の拠点である分館において、ごみのないきれいなまち、高齢者を支えるやさしい地域など、日常の中で幸福感を得られるまちづくりを目指すことが重要です。そのためには、地域に暮らすみんなの力が不可欠なはず。それが、住民の幸せのための松前町の「幸民館」です。

❖ 昌農内地区 ❖

子どもも地域の一員
多彩な活動で
深めた絆

米、麦、そら豆。地域の田を見ると、昌農内が農業の盛んな地域だと一目で分かります。しかし、のどかな農村地域から宅地開発が進み、その結果、人口が増加し、多種多様な職業を持った人が住民となり、活力をもたらす一方、考え方や習慣の違いが生じていました。

そこで、昌農内は、「住んでよかった昌農内、水よく、米よく、人情も」を合言葉に1年を通して多彩な活動を展開してきました。住民の参加は積極的で、環境美化活動と三世代の交流を兼ねて始めた「空き缶拾い」には、幼児から高齢者まで100人以上が集います。

昌農内分館長
喜安光男さん



動も「子どもがいる」こと。防災訓練には、はしご車と呼ばれることで大勢の子どもを集めました。運動会では中学生が放送や審判員など大会役員として活躍します。

喜安光男分館長は「5、6年前からようやく子どもが集まり始めた。運動会などが良くなったと思う。子どもたちも地域の一員であると自覚できる。『どうせこんけんい』じゃ絶対に地域は良くならない」と語ります。

どんど焼きの際には地元の新鮮な野菜の即売会が行われ、各種行事では農政婦人部が腕を振るうなど、農業の盛んな地域ならではの活動も住民相互のコミュニケーション力を高めています。

「いろいろな行事を通して、地域の絆を深めたい。これからは町と二人三脚で、防災と環境に力を入れたい」と意気込みを語っていました。



1_2月11日のかんざき塾では「しょうゆ餅」づくりに挑戦 2_大念仏について学習する塾生たち 3_亥の子大会には大勢の子どもたちが参加しました

